

迷える警察

インターネットで昨年の暮れ、こんなニュースが配信された。

石川県警は、交通死亡事故をめぐる星座別、干支別の発生・遭遇件数を公表した。

データは二〇〇三年一月から〇五年十月までの県内の死亡事故二百七十七件が対象。星座別で最も多かったのはふたご座で、三十二人が起こした。やぎ座三十人、おひつじ座二十八人と続き、最低はおとめ座の十四人。危険度上位の星座には「歩行者に注意」などとアドバイスを付けた。

善財

南無

菅原伸郎

交通死者の四割強を占める高齢者（六十五歳以上）向けに、干支別の事故遭遇率も示した。最も死者が多かったのは酉年で十七人。以下、申年、卯年の順で、「横断歩道を渡りましょう」などと注意を促した。

（時事通信十二月十八日付）

こんな記事を読んで、最近はおもしろがる人たちが多いらしい。わが家で話してみると、家族は「目くじらたててゐることはない」「お遊びじゃ

ないか」といった反応だった。私が講釈を始めると、食卓から一人、二人と消えていったが、そんな風潮だからこそ、あえて石川県警を批判する根拠を書いておきたい。

中村元訳『ブツダのことは』（スツタニパータ、岩波文庫）には「わが徒は、アタルヴァ・ヴェーダの呪法と夢占いと相の占いと星占いとを行つてはならない」という教えがある。「アタルヴァ・ヴェーダの呪法」とは、古代インドの迷信を指す。

親鸞の「正像末和讃」にも有名な歌がある。浄土真宗の土地柄である石川県なのに、警察幹部は知らなかったようだ。

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神・地祇をあがめつつ

ト占祭祀つとめとす

星座や血液型の占い、大安や友引などの「日柄」は、運命はあらかじめ決まっている、との前提があつて成り立つ。人間にはもともと定めがある、という宿命論だ。この考えを受け入れる人は、未来だけでなく、過去や現在についても同様に考えているはずだ。意識してにせよ、しないでにせよ、たとえば、あの連中の境遇は前世から定まっていたのだ、といった具合に……。

しかし、釈尊は《生まれによってバラモンとなるのではない。行為によってバラモンなのである》(前掲

書)と教えており、生まれによる身分を厳しく批判していた。日本の事情に置き換えるなら、部落差別や職業差別の問題である。羽江忠彦熊本学園大教授らが編集した『暮らしの中で——迷信と差別を考える』(解出版社)によると、明治政府さえも太陽暦を採用した一八七二年に「人知ノ開達ヲ妨クル」として「日の吉凶」を禁止していた。

それから百三十余年、インチキ占い師やオカルトを見張るべき公共機

関も時代に迎合するようになった。そして、マスコミが発表をそのまま無批判に取り上げる姿勢にも疑問を感じた。そこで調べてみると、朝日新聞石川版の記事では、終わりの方に溝部明男金沢大教授(社会学)のこんな談話がついていた。

「注意喚起策としてはおもしろいが、統計的な因果関係はもちろんない。自分は事故を起こしやすい、と本気にとる人がいると問題なので、お遊びだと明記すべきだろう」

少しはホツとしたが、それでも批判はまだまだ甘い気がする。どうせなら「お遊びとしても、警察はこんなことにカネとヒマを使うな」とでも皮肉ってよかつたらうに。

(すがわらのおお/東京医療保健大学教授)

